

イエスさまが、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方へ行かれた時のことでもあります。イエスさまは弟子たちに「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」（27節）と問われます。これに対して弟子たちは、「洗礼者ヨハネ」「エリヤ」「預言者の一人」そのように様々な世間の評判を伝えます。そこでイエスさまは言われました。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」（29節）これはあなたにとってイエスさまはどういうお方なのかを問う核心をついた質問でした。世間の評価、評判は、ある意味どうでもいいのです。わたしたちの周りにもイエスさまに対する様々な評価があるでしょう。反体制の革命家のように考える人もいます。弱く貧しい人々のために尽くした活動家のように考える人もいます。昔、小学校の図書館にリンカーンやヘレン・ケラーと並んでイエス・キリストという偉人伝がありました。そういう偉人の一人の一人と考える人も世の中には多いのです。では、あなたにとってイエスさまはどういう存在なのか。皆さんはどう答えるでしょうか。

ペトロが答えました。「あなたは、メシアです」（29節）「メシア」とは「油注がれた者」を意味するヘブライ語で、元々、旧約聖書に由来する言葉です。王や預言者、祭司に任職する際に、油を注いでその務めに就かせたことに由来します。例えば、サウルやダビデと言った人たちも王として就任する際に、油を注がれました。そういう意味で王もまたメシアなのです。イザヤ書45章1節には「主が油を注がれた人キュロス」とあります。キュロスはペルシャの王で、イスラエルをバビロニア捕囚から解放した人物として「油注がれた人（メシア）」と呼ばれました。神さまを信じていない人でもメシアと呼ばれるのです。メシアは、そういう政治的な王という意味合いが強い言葉でした。ですから「あなたは、メシアです」と答えた時のペトロも、そのようにイエスさまを理解していた。そのようなイエスさまを期待していたと考えられます。

それは、この後のペトロの反応に表れています。「それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日ののちに復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた」（31～32節）ここでイエスさまは、この世の王としてのメシアではなく、十字架で死なれ、三日目によみがえられるという仕方でわたしたちに救いをもたらすメシアであることを明らかにいたしました。しかもここは原文を見ると「～ねばならない」という強い必然を意味する言葉が使われています。神さまの必然がそこにあります。イエスさまの十字架とよみがえりは神さまの必然なのです。

ところが、ペトロはまるでイエスさまの言葉を遮るようにして、イエスさまをわきへお連れして、いさめ始めたというのです。「いさめた」という言葉は、この後、イエスさまがペトロを叱ったと書かれている言葉と同じ言葉です。ペトロはイエスさまを叱ったのです。マタイ福音書では「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」(マタイ16:22)と言います。これは強い否定です。神さまの必然を否定する。それを叱りつける。神さまより人間が前に出てくる奢りがそこにあります。御心よりも自分の思いを優先する。考えてみれば、そのようにして人間は、神さまとの約束を破り、身勝手に生きてきたのではないのでしょうか。これが聖書の示す罪です。

人間の思いを優先すること、人間に都合のよい世界にすることが救いでしょうか。多くの人々はそう考えるでしょう。でもその結果が今の世界の状態ではないのでしょうか。御心ではなく、人間を中心にするから、戦争が起こる、環境破壊が起こります。人間の生活を優先するから原発を作るでしょう。自分の思い通りにしようとするから、平気で相手の人格を踏みにじるようなことをするのです。人間の罪があらゆるこの世の悲惨を引き起こしています。この罪を解決しない限り、人間もこの世界もただ壊れていくだけです。

だからこそ、イエスさまはこの罪からわたしたちをお救いになられるメシアとして来られました。そのために神さまの必然である十字架とよみがえりの御業を行われたのです。イエスさまは、神さまの御心よりも人間の思いを優先し十字架とよみがえりを否定したペトロを叱りました。「イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。『サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている』」(33節)注目したいのは、この「引き下がれ」という言葉は、原文では「わたしの後ろへ行け」という意味になります。単純に「あっちへ行け」ということではない。これは意味深い表現です。

「わたしの後ろへ行け」つまりわたしの前に入るなということです。これは御心を遮り、神さまの前に出ようとするわたしたちに向かって前に入るなと言われていると理解することができます。神さまの御心よりも人間の思いを優先するわたしたちを制しています。また「後ろへ行け」というのは、後ろへ追いやること。イエスさまが罪をお引き受けになられ、罪をわたしたちの前から取り去ってくださるということではないのでしょうか。悔い改めの詩編として読まれる詩編第51編には、「わたしの罪は常にわたしの前に置かれています」(51:5)とあります。そのわたしの前に立ちほだかる罪を取り去り、ご自身の後ろへ追いやってください。それこそ十字架の御業に他なりません。そして三日目によみがえられて、神さまの御心に生きる新しい命を備えてくださいました。

宗教改革の戦いもそこにありました。神さまの恵みよりも人間の業を優先する。イエスさまの十字架の救いではなく、この世の富や成功を救いとする。「神のことを思わず、人間のことを思っている」(33節) この罪と戦うこと、これに抗うこと。この世にあって、わたしたちは終末の完成に至るまで、この罪との戦いを続けていかなければなりません。それが宗教改革の教会なのです。御言葉によって絶えず改革されていく教会なのです。ただこの戦いをわたしたちは一人をするわけではありません。イエスさまがサタンと対峙され、十字架でこの罪の支配を打ち砕いてくださいました。そして三日目によみがえり罪に勝利してくださいました。この勝利のイエスさまと共に戦うのです。恐れることはありません。弛まず信仰の戦い、内なる改革を続けていきましょう。

天の父よ。あなたを差し置いて前に出るその罪を覚えます。御心よりも、あなたの恵みよりも、絶えず自分を優先するのです。それで卑屈になったり、人を裁いたりするのです。けれどもイエスさまは、十字架とよみがえりによってその罪を後ろに追いやり、これに打ち勝ってくださいました。勝利のイエスさまと共に歩む強さを与えてください。今日からの一週間も、絶えず、神さまの御心を求めつつ、恵みに感謝する日々でありますように。主の御名によって祈ります。アーメン。